

断想： 張作霖爆殺80周年を迎えて

儀我壯一郎（中45回）



まえおき

懐かしい高田を思い出すと同時に、張作霖・張学良・蒋介石と私の父親との奇縁が心に浮かぶ。次の小論に気

付いていただければ幸いである。

- ①「日中関係の歴史と高田の思い出」高田高等学校校友会東京支部『支部会報』第16号、1992年11月。
- ②「歴史の小さな正誤表」『東京六華会20周年記念会誌』1993年12月。
- ③「回想の蒋介石と高田・日本」高田高等学校校友会東京支部『支部会報・雪椿』31号、2007年11月。
- ④「張作霖爆殺事件の真相」専修大学『社会科学年報』2008年3月。

張作霖爆殺事件をめぐって

今年は、張作霖爆殺事件（1928・昭和3年6月4日）の80周年に当たる。敗戦前の日本では、「満州某重大事件」と称して、真相は蔽い隠されたままであった。戦後も、事実をあいまいにするような動きがある。真相の解明がぜひ必要である。そこで、本年6月1日（日）11時から学士会館（神田錦町）で開催された「張作霖爆死80周年記念集会」では、事件の真相の本格的解明を目指した。

主催は、現代史を考える会と同集会実行

委員会。後援は、21世紀国際交流会、日本中国友好協会、海外音楽研究会、専修大学社会科学研究所、久保医療文化研究所。

司会は壺岐一郎氏（日本記者クラブ会員）。開会挨拶、関岡渉氏（現代史を考える会代表）の後、次の3題の講演。

- ①「張父子政権——その積極的な足跡を追って——」三田陽（東京工科大学名誉教授・工学博士）。
 - ②「張作霖爆殺事件の真相」儀我壯一郎（大阪市立大学名誉教授・商学博士）。
 - ③「中華民国史における張作霖・張学良」渋谷由里（富山大学准教授・文学博士）
- ①の三田講演は、「満州」の地で支配力・影響力をもった清朝から中華人民共和国にいたる9本の「国旗」と、5つの敗北者—満州族（清朝）、ロシア帝国、張父子政権、大日本帝国、中国国民党—の足跡と張父子政権の積極面に注目する内容であった。「敗者の歴史的役割の検討」という斬新な視角である。

②の儀我講演の要旨。1914年6月28日のセルビアの青年によるオーストリア皇太子夫妻暗殺が、第1次世界大戦の口火を切った。張作霖爆殺は、1931年9月の「満州事変」からの日中戦争を含む第2次世界大戦（1939—45）の火蓋を切った。直接の首謀者は、関東軍高級参謀河本大作大佐、実行の主役は東宮鉄男大尉であるが、その支持者は陸軍内部にとどまらなかった。

張作霖政権温存派の田中義一政友会内閣の総辞職と「5・15事件」など軍部の相次ぐテロ・クーデターによる「二

大政党制」・政党政治の終焉にいたる経緯なども検討された。

- ③の渋谷講演は、孫文（1866－1925）と蒋介石（1887－1975）を代表する南から北への革命と、張作霖政権を含む諸軍事政権の北から南への中央集権的支配力強化の動きを対比しつつ、孫文・蒋介石と張父子政権との関係、張政権下の財政・経済状態、中華民国史にとつての張作霖爆殺事件の意味を考察した。考察のさいに、日中関係の他、米・欧・ソ連などの動向にも注目する必要があると強調された。

次はシンポジウムで、パネラーは4人であった。

- ①桑田富三子（大連生まれ。河本大作大佐の孫。日本聖心同窓会 JASH 元会長、平和と寛容の国際絵本展「ハローディアエネミー実行委員長」）は、上述の3題の講演についての短い感想の後、家庭内の祖父としての河本大佐、祖父の祖母への結婚申込みの言葉、大連生活の紹介などから、敗戦後の山東省での日本兵2600人の中国共産軍との戦闘に関する河本大佐の役割（池谷薫『蟻の兵隊』新潮社、2007年参照）にいたるまでを報告。
- ②三田陽（大連生まれ。著書『満州の落陽』など）は、講演を補足し満州での敗戦前後の体験についても報告。
- ③儀我壮一郎（張作霖爆死のさい同じ車輛に同乗していた張作霖の軍事顧問儀我誠也少佐〈当時〉の長男。共著『中

国の国民生活』『中国革命史』など）は、主として講演の補足。

- ④渋谷由里（著書『馬賊で見る「満州」』『「漢奸」と英雄の満州』）も主として講演のまとめと補足。

その後、活発多彩な質疑討論が重ねられた。

続いて、佐藤光政氏（二期会）、小滝晴子氏（海外音楽研究会）による満州関連の歌曲の歌唱。次に、山形放送製作（1987年日本民間放送連盟賞、最優秀作品賞受賞）の「セピア色の証言～張作霖爆殺事件の秘匿写真～」のDVD 上映という充実したプログラムであった。

参加者は、予想を大きく上回る150名以上。

最後に懇親会で締めくくった。

爆殺事件関係者と主催者の願い

6月1日には、田中義一首相の孫田中素夫氏、河本大作大佐の孫桑田富三子氏、東宮鉄男大尉の縁故者東宮哲哉氏、菊池武夫張作霖軍事顧問の孫菊池武則氏、儀我誠也張作霖軍事顧問の長男儀我壮一郎、また伊藤博文の孫の夫人伊藤瑛位子氏、歴史文学の永井路子氏その他多数の有識者と報道関係者が参加された。

80年の歳月を経て、爆殺事件の関係者の子孫が、当時の立場を超えて一堂に会し、真相の解明に努めたのである。

張作霖爆殺事件の後、1929年4月には労農党代議士山本宣治が右翼により暗殺された。田中義一内閣の次の民政党内閣の浜口雄幸首相は、1930年右翼に狙撃され、翌年

死去。1931年9月18日「満州事変」。前蔵相の井上準之助は、1932年2月、三井合名理事長団琢磨は翌3月、血盟団員によって暗殺された。政友会内閣の犬養毅首相は、1932年の「5・15事件」で暗殺され、政党内閣の終焉となった。1936年には、陸軍の皇道派主体の「2・26事件」によって、斉藤実、高橋是清元首相他が殺害された。岡田啓介首相は人違いで難を免れ、首謀者は死刑となったが、この後、軍部の政治支配はさらに強化。1937年、日中戦争本格化。

テロと戦争の口火を切った張作霖爆殺事件の関係者の子孫と主催者が、80年後の6月に、一致して、「このような事件の再現を決して許さず、平和を守りぬこう」と強く訴えた。このことが、この集会の最重要な意義であった。

なお、『朝日新聞』2008年6月15日(日)

の全一面の特集「張作霖爆殺事件」(写真で見る戦争—永井靖二記者)は、この集会と深く関連する内容であり、参照していただければ幸いである。

張作霖爆殺事件は、張作霖の殺害という目的からは「小さな成功」であった。しかし大目的としていた満州の早期軍事占領を果たし得ず、逆に、張作霖の後継者張学良が「易幟」によって国民党の南京政府に合流して全中国が統一するという、日本政府などの意に反する結果を招いた。実行者の立場からは、大局的に見て「大きな失敗」である。そして、1931・昭和6年の「満州事変」は、張作霖爆殺の失敗から学びつつ、より「積極的」な満蒙支配を目指す軍事行動であった。その「成功」は、敗戦への第一歩となるのである。

